



東京日々新聞

八百七十七号



深川西六間振餅屋渡世

昔蒲與吉と云ふ者久く病ひの床ありしが其妻のとい本年廿五才と云ふ名も背らす

して深り安らふ水性あて夫の甘も鼻も附さしつう

小籠鹽田兼吉と人目忍びて寐の子餅契る数さへ重ね着る

夜の衣の度重し若くも本夫の全快あま二人り中の自在餅

此快樂へ遂げしは唯さ枯るべき昔蒲與吉毒害るると膽太く

二人りの法とわきりなと薬出瓶へ配劑の毒あつそこの此病者あやらもろ

飲むる否鼻耳口眼より血と吐て忍ら没命為しけり内い喜ひ

表し患ひ形の如く野送り誰と憚りの閑守も泣真似

あせりが發覺し遂に警視の支應へ呼ばせ



萬齋芳幾



山より有人誌

Ⓜ 腰しく斜向あり
と云ふあり一次第
と白扶せし本月
九日東京裁判所へ
送致せらる

人物 具足屋

渡辺彫栄

